ずいそう

「愛・地球博」閉幕によせて

鈴　木　千亜希

「愛・地球博」が惜しまれつつ閉幕してから，二カ月近くが経ちました。長久手・瀬戸の会場も，現在は晩秋の静けさの中にあります。会場内の木々も紅葉して，中々の色合いです。今が開催期間内であれば，海外からの来場者にも，日本の四季の美しさをアピールできたのにと，残念に思ってしまう程でした。その美しい自然の中に残された展示施設やグローバルループ（空中回廊）は，今静かに佇んでいます。まるで長い夢の跡のような寂しさです。

施設の解体作業は，これから本格化していきます。会場が新しい姿に生まれ変わるのも，そう先の話ではありません。

弊社では，会場の造成工事・長久手日本館，それと株式会社電通殿担当の大地の塔（名古屋市館）を施工いたしました。

会期中は台風が接近するたびに，施工物件の無事を全員で祈りました。集中豪雨で，造成した部分が崩れる事はないだろうか。政府館の木造構造や竹の繭も，想定を超えるような強風が吹いたらどうしようか。現場担当者は素より，名古屋支店としても，緊急連絡体制を取り，不測の事態に備えていたのです。

幸いな事に，会期中に大きなトラブルは無く，胸を撫で下ろしました。

さて，「自然の叡智」という博覧会のテーマに対して，私達にはこれから何ができるのでしょうか。私が所属している建設業界は，世間から悪役というレッテルを張られているように思えます。自然の力に対して戦いを挑むという姿勢のままでは，そのイメージを変える事はできません。「自然の叡智」を理解して協調する事でしか変える事はできないのかもしれません。

しかし，自然のメカニズムは複雑で，私達はその極一部を知っているのにすぎません。自然と協調すると簡単に言っても，実行するのは大変困難です。

例えば，現在の海に近い都市は，ほとんどが扇状地に発達しています。扇状地は，川により土砂を供給され，大きくなってきました。しかし都市化がその自然の動きを止めてしまいました。扇状地を都市という形で固定してしまったからです。川やダムは滞砂に溢れ，海への土砂の供給が減り，場所によっては海岸そのものが消失の危機に曝されています。この悪循環をどこかで断ち切らなければなりません。

ところが最近の大型土木工事に対しては，特に負のイメージばかりが先行しています。現在，槍玉に挙げられているダムにしても，「水」の問題だけで語られるのは大変残念な事です。「川」の機能をもう一度見直し，「山・川・平野・海」をもっと総合的に議論してほしいと切に願っています。

もっと小さい個人のレベルではどうでしょう。自分で出来る事といえば，省エネルギーやリサイクルに協力する事です。

移動には，なるべく環境負荷の少ない手段を選択する。空調の温度はこまめに調整する。電気製品はこまめにスイッチを切るように注意する。私も実際に意識はしています。リサイクルは牛乳パックやトレイ・ペットボトルの回収に協力する事です。

でも最近少し考えてしまいます。リサイクルに使用するために，日本全国で牛乳パック等を家庭で洗浄するとしたら，どれぐらいの環境負荷があるのだろうか？　ビンをリサイクルして一括洗浄した方がいいのでは？　トレイを洗浄するより，昔のように紙包みにして焼却した方がいいのではと思ってしまいます。最近販売されている無洗米も，とぎ汁を無くしたいとの思いから開発されたと聞きます。

「自然の叡智」を理解して，循環型社会に生きようとするためには，大から小までもっとよく考えていかなければならないようです。「人類の叡智」は常に「自然の叡智」を先生にしてきたはずです。私は先人達の成果を正当に評価し，謙虚に反省できるような目を養いたいと思います。

自分に何ができるのか，大変な宿題を「愛・地球博」から貰ってしまったようです。

――すずき　ちあき　株式会社熊谷組名古屋支店土木事業部
工事管理グループ副部長――